

民主化闘争情報

No. 1000

2018年6月25日
発行 日本鉄道労働組合連合会
(JR連合)

組合員の大量脱退で組織瓦解が進む渦中のJR東労組は、6月13日、さいたま市文化センターにおいて、第36回定期大会を開催した。すでに組合員数が1万5千人を切っている事態にまで陥った同労組は、定期大会を異例の1日開催とし、2018春闘が「大敗北」であり、方針・戦術の間違いを「間違い」と認める総括を行い、新執行部を確立したようだ。「新生JR東労組を創生する」らしいが、JR総連に引き続き、ここでも目を疑うような役員人事が行われた。

JR東労組が第36回定期大会を開催し、驚愕の新体制 前体制の指導部中枢にいた書記長ら三役が、新執行部三役へスライド就任！

前体制（2018春闘でスト戦術を主導）の指導部の中枢、組合実務の総括責任者＝書記長であった山口浩治氏が中央執行委員長に選出され、村田俊雄副委員長（執行委員長代理）らは留任、東京・八王子・水戸の3地本からの執行委員選出は皆無となったのである。機関紙「緑の風 第679号（6月19日付）」では、村田委員長代理が冒頭あいさつで「吉川執行委員長（当時）が『三役での打合せもない中、スト権行使の戦術等を独裁的に決めて打ち出し、突っ走った』」「疑問があった」旨を述べたことが掲載されている。指導部の中枢にいたにも拘わらず、まるで‘他人事’だ。さらに山口氏は総括答弁で、「制裁対象者（中略）に責任をなすりつけているわけではありません。この間、彼らは組織決定や運営に対して、それを逸脱したことから制裁審査委員会が設置された（中略）、18春闘の責任をとって制裁対象者になっているわけではありません。」などと分かりにくい理屈を述べ、自らを含めた指導部の責任に触れつつも、結局は‘吉川氏らに振り回されたのが真相’であるかのように、自己保身の論理展開に明け暮れている。なぜ吉川・宮澤両氏ら‘頭’のみがページされ、山口氏らは許されるのか。多くの脱退者や一般組合員からすれば、体質は同じままの変わり身に過ぎず、反吐の出る結末ではなかろうか。「緑の風FAX版 No. 1（6月14日付）」では、「組合員の声を大事にし 新たなJR東労組運動を創り出す新体制発足！！」とあるが、会社も脱退者も、もはや相手にしないであろう。

東京地本OBら「JR東労組を憂う会」は革マル本体指導部か！？‘必要悪’的な立ち回り？

「JR東労組を憂う会」メンバーを、JR総連やJR東労組は自分たち現役世代・ユニオンの総団結を阻害する‘組織破壊者’と敵視するが、実態はどうか。「憂う会」ホームページも立ち上がり、本格的な‘内輪もめ’が始まったように見える。産別・単組ともに現‘主流派’の連中が口を揃えて一斉に「憂う会」の猛批判を展開し、内外が目を向けるように仕向けていると映る。3月に関東の車両系統職場で結成された「新鉄労」や5月に新潟で結成された新労組に対しては、この間ほとんど無反応に等しかった連中が、大会を機に、‘一部OBら’が結成した組織を‘敵’と断じて異口同音で総‘口撃’するさまは極めて異様だ。用意された洗脳的シナリオなのだろうか。身近なところに徹底的かつ非情なまでに糾弾すべき内部敵を作って団結を促す手法は、革マル派の代表的な手口である。見え隠れする「憂う会」のメンバーを見るに、革マル本体の意向を汲んだ輩が中心で、JR革マル・フラクションを指導する指導部隊とでも見るべきではないか。あるいは、革マル本体と旧動労（組合）を主とするJR革マル勢力との主導権争い、見せかけの内部紛争劇場、との見方もある。現実問題、‘革命家’が数名いれば、都市圏輸送はいつでも麻痺させることができると言われるが、“組織を戦闘的な革命組織・集金装置に変えていくために少数先鋭化させて贅肉を削ぎ落すべし”という方向性は、カリスマ指導者が生存中から、革マル本体の中で脈々と唱えられ息づいてきた思想と言われている。そう考えれば、目の前で起きているゴタゴタは、冷めた目で俯瞰しているシナリオライター（革マル本体）と、その意向を組んで動く中枢役員、そして何も知らされずに本気で喜怒哀楽する人々ら、といった構図の茶番劇か…？。今後、気になる反主流派3地本の動きも合わせて良く見ていけば、蠢きの真相が見えてくるかもしれない。いずれにせよ、2020年は目前に迫る。オリンピック輸送を人質にしようと蠢く輩の動きが、2019春闘前後までに強く表面化するかもしれない…。早急な対処が必要だ！